東北大學中國語學文學論集　第24号（2019年12月30日）

鄭風溱洧篇解釋史考－漢唐詩經學から朱熹の淫詩説までを中心に－

髙崎　駿士

一、はじめに

後漢の班固（32～92年）らの『漢書』地理志下には、鄭國の「淫」らな風俗を詠う詩篇として、『詩』鄭風の出其東門篇と溱洧篇が次のように引用されている。

土陿而險、山居谷汲、男女亟聚會、故其俗淫。鄭詩曰、出其東門、有女如雲。又曰、溱與洧、方灌灌兮。士與女、方秉菅兮。恂盱且樂。惟士與女、伊其相謔。此其風也。[1]

土地が狭く険しく、山間に住んで溪谷に水汲みし、男女が頻りに集い会うので、その風俗は淫らである。鄭風の詩篇に、「其の東門を出づれば、女有りて雲の如し。」（出其東門篇）、また「溱と洧と、方に灌灌たり。士と女と、方に菅を秉る。」、「恂に盱にして且つ楽し。惟だ士と女と、伊れ其れ相謔す。」（溱洧篇）という。これはその風俗である。

出其東門篇の引用部は、「東門」に「女」が「雲」のように群がることを詠う箇所であり、これだけでは『漢書』にいう「土陿にして險しく、山に居りて谷に汲み、男女亟ば聚會す」との關連は十分に窺えない。一方で、溱洧篇の引用部では、鄭國に流れる「溱」「洧」の川邊で、「士」と「女」が草摘みをして、「相謔」することが詠われており、『漢書』の指摘と似る。『漢書』が鄭國の風俗を「淫」と評價したのは、溱洧篇に詠われる内容に拠るところが大きいと考えられよう。

こうした鄭風の詩篇に詠われる内容を鄭國の「淫」らな風俗とする評價は、『白虎通』禮樂篇にも引き繼がれており、『論語』衞靈公篇の「放鄭聲、遠佞人。鄭聲淫、佞人殆。（鄭の音曲をやめて、口上手なものを退けよ。鄭の音曲は淫らで、口上手なものは危険である。）」や陽貨篇の「惡鄭聲之亂雅樂也。（鄭の音曲が雅樂を亂すのが憎い。）」にみえる孔子の「鄭聲」評價とも關連付けられて、次のように説明されている。

---

[1] 『漢書』（中華書局、1962）1652頁。

樂尚雅何。雅者、古正也、所以遠鄭聲也。孔子曰鄭聲淫何。鄭國土地民人、山居谷浴、男女錯雜、爲鄭聲以相悅懌。故邪僻、聲皆淫色之聲也。[2]

音樂が雅を尚ぶのはどうしてか。雅とは、古の正統であるので、鄭聲を遠ざけるのである。孔子が「鄭聲は淫である」と言ったのはどうしてか。鄭国の土地の人々は、山に住み谷に水浴びし、男女が入り混じって、鄭聲を歌って互いによろこぶ。故に邪で、その音樂はすべて淫色の音樂である。

また、『禮記』樂記篇の疏に「異義云」として引用される許愼（約 58～約 147 年）の『五經異義』には、「今論說、鄭國之爲俗、有溱洧之水、男女聚會、謳歌相感、故云鄭聲淫。（今文の論說では、鄭國の風俗には、溱洧の水邊に男女が集まり、歌ったり心を通い合わせたりすることがあるという。故に「鄭聲は淫」という。）」[3]と、今文系統の言說において、鄭國の風俗を根據に、『論語』の「鄭聲淫」が解釋されていたことが示唆される。ただし、こうした「鄭聲淫」の解釋の是非については、しばしば問題視されている。

先行研究[4]では、孔子がいう「鄭聲淫」の本來の意味とは何か、班固や許愼の言說をどう評價するべきか、「鄭聲淫」が後世にいかなる影響を與えたか、などが主に檢討されている。それらをまとめると次のようになる。一般に、「鄭聲」とは鄭國の音樂を指すが、その意味する範疇は「鄭衞の音」「新聲」「淫聲」といった春秋時代以降に民間で生まれた新興音樂をも含み、宮廷内で演奏されていた「雅樂」と對立する音樂を指したことばだと考えられている。孔子にとって『詩』は「雅樂」の範疇にあるはずであり、よって、「鄭聲淫」は「雅樂」に對立する音樂を「淫」と評したものだと解するのが大方の見解である。

つまり、班固や許愼らは、主に『詩』鄭風の溱洧篇に詠われる内容から鄭國の風俗的特徵を捉えようとした一方で、「鄭風」と「鄭聲」を混同して、『詩』とは本來關係のなかった、『論語』にみえる「鄭聲淫」という孔子のことばを恣意的に取り上げ、鄭國の風俗を「淫」とする評價と關連付けていったものだと言えよう。

では、後漢以降『詩』解釋の主流となる古文系統の毛序・毛傳・鄭箋において、溱洧篇はど

---

[2] 陳立撰・呉則虞點校『白虎通疏證』（中華書局、1994）97 頁。

[3] 十三經注疏本『重栞宋本禮記注疏　附校勘記』（藝文印書館、1955）。引用部冒頭の「今論說」については、田村和親「鄭聲の概念の生成過程（上）—春秋思想との關連に於て—」（『二松學舍大學人文論叢』第 16 輯、1979）、大島愿恭「鄭聲解釋考（一）」（『密教文化』133 号、1981）などにおいて今文系統の論說であることが指摘されている。その他、陳壽祺・皮錫瑞撰・王豊先點校『五經異議疏證・駁五經異議疏證』（中華書局、2014）192、542 頁を參考。

[4] 日本における「鄭聲淫」に關する研究は、田中和夫「鄭・衞の音について」（『毛詩正義研究』白帝社、2003。初出は『中國文學研究』第 3 期、1977）、田村和親「鄭聲の概念の生成過程（下）—春秋思想との關連に於て—」（『二松學舍大學人文論叢』第 17 輯、1980）、大島愿恭「「鄭衞の音」について」（『哲學』33、1981）などがある。また、中國では 1970 年代以降、100 篇以上の論文が發表されており、主な研究狀況は白凱氏の「新時期《鄭風》研究綜述」（『安慶師範大學學報（社會科學版）』第 36 卷第 6 期、2017）に簡潔にまとめられている。

のように解されているのだろうか。毛序は次のようにいう。

溱洧、刺亂也。兵革不息、男女相棄、淫風大行、莫之能救焉。[5]

溱洧篇は、亂を刺る詩である。戰爭が止まず、男女は相手を見捨てて、淫らな風俗が流行し、これを救うことができないのである。

毛序は「兵革」が止まず、「男女」が離れ、「淫風」が流行する世を救えないことを詠った諷刺詩とみなす。これに對して鄭箋は、「亂者、士與女合會溱洧之上。(亂とは、士と女が溱洧の邊に集い合うことである。)」と、特に「士」「女」が「溱洧の上」に「合會」することを「亂」と捉えて、溱洧篇の主題を說く。男女の「合會」を「亂」とみなす點は、先述した「鄭聲淫」に關する言論と類似していよう。しかしながら、毛序が「兵革」の不斷から男女の離散、「淫風」の流行に至るまでの一連の影響關係を指摘する一方で、鄭箋は毛序が述べる「亂」の原因である「兵革」には言及せずに、男女の「合會」のみを强調する。こうした毛序と鄭箋の視點の違いは、以降、「亂」の捉え方や毛序に對する認識、詩篇の構造的把握などの違いによって、多樣な角度から論じられ、異なる解釋が生じるきっかけとなる。

以下、本稿では、これまであまり檢討されてこなかった鄭風・溱洧篇の解釋史について、特に漢代から宋代の朱熹に至るまでの言說を中心に取り上げ、歷代の解釋者たちの認識の展開について考察する。

二、漢唐代詩經學の溱洧篇解釋

先述したように、溱洧篇の毛序と鄭箋の「亂」の認識には、特に「兵革」の影響への言及において違いがみられた。

そもそも古注において「兵革」の語を用いて解釋する例は多くない。毛序には、鄭風の中に連續して配置される出其東門篇(閔亂也。公子五爭、兵革不息、男女相棄、民人思保其室家焉。)、野有蔓草篇(思遇時也。君之澤不下流、民窮於兵革、男女失時、思不期而會焉。)、溱洧篇の三篇に計三例みえるが、毛傳には一度も「兵革」の語は用いられていない。そして、鄭箋では鄭風・出其東門篇の第一章に一例のみある。

出其東門篇の毛序には「公子五たび爭い、兵革息まず」とあり、鄭箋が「公子五爭者、謂突再也、忽子、子、儀各一也。(「公子五たび爭う」とは、突が二度、忽とその子と儀がそれぞれ一度爭ったことを言う。)」と注するように、鄭國の公子たちの五度の利權爭いという『左傳』

---

[5] 十三經注疏本『重栞宋本毛詩注疏　附校勘記』(藝文印書館、1955)。以下、『詩』本文と古注に關する引用は、すべてこれに據る。

にみえる記事との關連が指摘されている[6]。これは歴史書の記録によって把握しうる鄭國の「兵革」である。鄭箋は詩篇の内容と「兵革」との關連について、第一章「縞衣綦巾、聊樂我員。」に次のように注する。

時亦棄之、迫兵革之難、不能相畜。心不忍絶、故言且留樂我員。此思保其室家、窮困不得有其妻。而以衣巾言之。恩不忍斥之。

（男が）時に女を見捨て、兵革の難に迫られ、相手を養うことができなかった。心情としては（相手を）拒むことが耐えられなかったので、故にしばしの間滞在して我を樂しませてくれと言うのである。これは室家を維持しようと思うが、困窮して妻を持つことができないのである。衣服を用いて相手のことを言う。相手を追いやることが恩情として耐えられないのである。

鄭箋は「兵革の難」によって困窮し、妻を持つこともままならなくなった人々が、「絶つに忍び」ない思いを詠っていると解釋する。つまり、公子の爭いによって引き起こされた鄭國の内亂が、人々の生活を壓迫し、「室家」を維持できなくした狀況を想定するのである。これは、出其東門篇、野有蔓草篇、溱洧篇の三篇に對する毛序が「兵革」を原因として男女の離散が生じることを説明するのと同樣の認識だと考えられる。では、なぜ鄭箋は出其東門篇以外では、「兵革」について言及しないのか。

毛序の「公子五たび爭いて、兵革息まず」については、つとに『正義』が「經二章皆陳男思保妻之辭。是思保室家也。其公子五爭、兵革不息、敘其相棄之由、於經無所當也。（經文の二章はすべて男が妻を養おうと思うことばを陳べたものである。これは室家を維持することを思うものである。「公子五たび爭いて、兵革息まず」とは、相手を捨てた理由を叙述するものだが、經文には該當する箇所が無い。）」と、該當する箇所が詩篇中にないことを指摘する。『正義』が提起する毛序と詩篇の不合に對する認識が、鄭玄にも同樣にあったのかは現存資料から見出せない。ただし、先行研究が指摘するように、鄭箋は毛序や毛傳に全面的に追隨して注釋をしているわけではない點は注意すべきであろう[7]。鄭箋は毛序のいう「兵革」の意味を解するために、出其東門篇の毛序にある「公子五たび爭う」を取り上げて、鄭國の内亂との關連を一度は指摘

---

[6] 出其東門篇の毛序に對する『正義』には、「公子五爭」に關連する『左傳』の記事が次のように指摘されている。「桓十一年『左傳』云「祭仲爲公娶鄧曼、生昭公、故祭仲立之。宋雍氏女於鄭莊公、生厲公。故宋人誘祭仲而執之、曰『不立突、將死。』祭仲與宋人盟、以厲公歸而立之。秋、九月、昭公奔衞。己亥、厲公立。」是一爭也。十五年傳曰「祭仲專、鄭伯患之、使其壻雍糾殺之。雍姬知之、以告祭仲。祭仲殺雍糾。厲公出奔蔡。六月、乙亥、鄭世子忽復歸于鄭。」是二爭也。十七年傳曰「初、鄭伯將以高渠彌爲卿、昭公惡之、固諫、不聽。昭公立、懼其殺己也、弑昭公而立公子亹。」是三爭也。十八年傳曰「齊侯師于首止、子亹會之、高渠彌相。七月、齊人殺子亹、而轘高渠彌。祭仲逆鄭子于陳而立之。」服虔云「鄭子、昭公弟子儀也。」是四爭也。莊十四年傳曰、「鄭厲公自櫟侵鄭、及大陵、獲傅瑕。傅瑕曰『苟舍我、吾請納君。』與之盟而舍之。六月、傅瑕殺鄭子而納厲公。」是五爭也。」

[7] 邊土名朝邦「鄭玄の詩經解釋」（『中國哲學論集』6、1980）。

した。しかし、詠われる詩篇の内容との不合に疑問を抱き、必ずしも「兵革」を説く必要はないと考え、他の詩篇では敢えて言及しなかった。あるいは、出其東門篇ですでに「亂」について言及したため、同じ鄭風に連續して配置される溱洧篇では、重複を避けて説明を省略した可能性も考えられよう。少なくとも、鄭箋が、鄭國で起きた「兵革」を全く考慮せずに鄭風諸篇を解釋しているのではないことは、出其東門篇の注から知り得る。

では、溱洧篇はどのように解釋されているのか。次に、詩篇全文を擧げ、本文に附された毛傳と鄭箋の位置を①から⑧で示す。

第一章	溱與洧、方渙渙兮。①	溱と洧と、方に渙渙たり。
	士與女、方秉蕑兮。②	士と女と、方に蕑を秉る。
	女曰觀乎、士曰既且。③	女曰く觀んやと、士曰く既に且けりと。
	且往觀乎。	且き往きて觀んや。
	洧之外、洵訏且樂。④	洧の外、洵に訏にして且つ樂しと。
	維士與女、伊其相謔、	維れ士と女と、伊れ其れ相謔し、
	贈之以勺藥 。⑤	之に贈るに勺藥を以てす 。
第二章	溱與洧、瀏其清矣。⑥	溱と洧と、瀏として其れ清し。
	士與女、殷其盈矣。⑦	士と女と、殷として其れ盈んなり。
	女曰觀乎、士曰既且。	女曰く觀んやと、士曰く既に且けりと。
	且往觀乎。	且き往きて觀んや。
	洧之外、洵訏且樂。	洧の外、洵に訏にして且つ樂しと。
	維士與女、伊其將謔、	維れ士と女と、伊れ其れ将謔し、
	贈之以勺藥。⑧	之に贈るに勺藥を以てす。

①【毛傳】溱洧、鄭兩水名。渙渙、春水盛也。(溱洧は、鄭の二つの川の名。渙渙は、春水の盛んなことである。)

【鄭箋】仲春之時、冰以釋、水則渙渙然。(仲春の時、氷が融け、水流は渙渙然として盛んである。)

②【毛傳】蕑、蘭也。(蕑は、蘭である。)

【鄭箋】男女相棄、各無匹偶、感春氣竝出、託采芬香之草、而爲淫泆之行。(男女が互いに離れ、それぞれ配偶者がおらず、春の氣に感じて共に出かけ、芳しい香りの草を摘むことにかこつけて、淫らでほしいままな行爲をする。)

③【鄭箋】女曰觀乎、欲與士觀於寬閒之處。既、已也。士曰已觀矣、未從之也。(「女曰く觀んや」とは、士と一緒にひらけた所を見ようと欲するのである。既は、已である。士はすでに觀にいったと言い、女のことばに從わないのである。)

④【毛傳】訏、大也。（訏は、大きいである。）

【鄭箋】洵、信也。女情急、故勸男使往觀於洧之外、言其土地信寛大又樂也。於是男則往也。（洵は、信である。女はせっかちなので、男を誘って洧の外に見に行こうとする。その土地がひらけており樂しいことを言う。そこで男は行くのである。）

⑤【毛傳】勺藥、香草。（勺藥は、香草である。）

【鄭箋】伊、因也。士與女往觀、因相與戲謔、行夫婦之事。其別、則送女以勺藥、結恩情也。（伊は、因るである。士と女は（洧の外に）見に行き、そうして共に戯れふざけ、夫婦の事を行う。二人が別れるときは、（男は）女への贈り物に勺藥を用いて、恩情を結ぶのである。）

⑥【毛傳】瀏、深貌。（瀏は、深い様子である。）

⑦【毛傳】殷、衆也。（殷は、衆いである。）

⑧【鄭箋】將、大也。（將は、大きいである。）

毛傳は、①で「溱洧は、鄭の兩水の名。渙渙は、春水の盛んなるなり。」と、「溱」「洧」が鄭國に流れる川で、「春」に水が盛んに流れるさまが詠われると解する。ただし、訓詁的解釋が中心で、②④⑤⑥⑦に至っても、詩篇中の男女の應答に關する説明はみえず、毛序がいう「亂を刺る」意についての言及もない。そのため、毛傳のみでは毛序のいう男女の離散や淫風の流行といった「亂」の狀況について、詩篇の内容をどのように解釋していたのかは十分に知り得ない。

一方、鄭箋は、①で毛傳の「春水の盛んなる」を説明して「仲春」の時と具體的にしつつ、さらに、②③④⑤では毛傳が説明しない男女の應答の内容について言及する。特に、②では、「男女相棄て、各おの匹偶無く、春氣に感じて竝び出で、芬香の草を采むに託つけて、淫泆の行いを爲す。」と、男女の「淫泆の行」が詠われているとして、毛序に對する「亂」の解釋を敷衍する。さらに、⑤では「士と女 往觀し、因りて相與に戲謔し、夫婦の事を行う。其れ別るるに、則ち女に送るに勺藥を以てし、恩情を結ぶなり」と、男女が戯れて「夫婦の事」をすることだと述べる。「夫婦の事」とは、末句で「之に贈るに勺藥を以てす」と、別れ際に「勺藥」を贈る行爲を「恩情を結ぶ」ことだとみなし、これを「夫婦」となる契りとするのであろう。

この點について、『正義』は「及其別也、士愛此女、贈送之以勺藥之草、結其恩情、以爲信約。男女當以禮相配、今淫泆如是、故陳之以刺亂。（その別れにおいて、男はこの女を愛し、勺藥の草を贈り物として、その恩情を結び、誓いとするのである。男女は禮に從って夫婦となるべきだが、今はこのように淫楽に耽っているので、そのことを述べて亂を刺るのである。）」と、鄭箋と同樣に「勺藥」を贈る行爲を「恩情を結」ぶものだとして、さらに「信約と爲す」と説明を付加する。ただし、この行爲は「淫泆」であり、本來であれば「禮」を用いて「相配」すべきだとし、「禮を以て相配」しない點を、毛序の「亂を刺る」の内實とみなす。②の「芬香の草

を采む」ことと同様に、⑤の「勺藥」を贈る行爲もまた、「淫泆の行」だとみなすのである。これは經學的道德觀における「禮」の重視によって、詩篇の内容を「亂」と捉えたものである。

また、毛序とは異なる鄭箋や『正義』の「亂」の捉え方からは、詩篇の内容と毛序の整合性をとろうとする意圖を推測することもできよう。溱洧篇の毛序がいう「兵革」について、鄭箋と『正義』は特に言及しないものの、先述した出其東門篇の『正義』が指摘するように、溱洧篇もまた詩篇中から「兵革」の狀況を讀み取ることはできず、歷史書等にみえる記述との直接的な關連性もまた說明できなかった。そこで、鄭箋と『正義』は經學的な諷刺詩として解釋するため、詩篇中に詠われる「男女の合會」に焦點を絞り、そちらに批判の矛先を向けることで、この問題を回避しようとしたのだろう[8]。

その他、漢代の溱洧篇解釋として、次のような韓詩說が傳えられている。

韓詩外傳曰、溱與洧、說人也。鄭國之俗、三月上巳之日於兩水上、招魂續魄、祓除不祥。故詩人願與所說者俱往觀也。[9]

『韓詩外傳』に言うに、「溱と洧とは、人を悅ばせるものである。鄭國の風俗では、三月上巳の日に兩水の邊で、招魂續魄し、不祥を拂う。故に詩人は好きな相手と共に見に行こうとするのである。」と。

韓詩說では、溱洧篇を三月上巳に鄭國の水邊で行われた不祥を祓う禊祓の風俗と關連付け、詩人が好む相手とともにその風俗を見に行こうすることを詠う詩篇だとする。韓詩說は詠われる内容を「淫」らな行爲と捉える古注とは異なり、「不祥を祓う」行爲とみなしており、非難する口調ではない。

以上、韓詩說を除いた鄭箋、『正義』の詩篇解釋の論點は、毛序の「亂を刺る」に對する視點の違いや、詩篇中に詠われる男女の「合會」や「勺藥」を贈る行爲に對する評價にある。では、こうした古注の違いを受けて、宋代詩經學において溱洧篇はどのように解釋されていくのか。

---

[8] 邊土名朝邦氏は注7前掲論文において、「個別知識はそれ自體のあらわす實質意義よりも、他の個別知識との表層的なつながりが重視される傾向がある。」と述べたうえで溱洧篇第一章の鄭箋を引用し、鄭玄の『詩』解釋における「表層」と「深層」の理解に對して次のように述べている。「彼（筆者注：鄭玄）は明らかにこの詩の深層にある實質的意義を全面的に理解している。この詩が男女の交情にかかわる詩であることを百パーセント理解している。ところが彼は理解している深層の面でこの詩を評價しようとはしない。彼は、むしろ表層のもつ形式的意義の「淫泆の行」においてこの詩を評價する。元來詩はとりわけその個別的完結性のつよいものである。全體から個へと降下するかたちで詩經を整理づけ解釋するかぎり、詩がその深層の面においてまともに評價される時節がやってきたとき、鄭玄の解釋學はそのもつ假構性を見るも無慘にさらけ出さざるを得なかった。」

[9] 『太平御覽』卷886・妖異部二・魂魄（中華書局、1960）。『文選』卷46・顏延之「三月三日曲水詩序」（『日本足利學校藏宋刊明州本六臣注文選』人民文學出版社、2008。以下、『文選』からの引用はこれに據る。）の李善注には「韓詩曰、三月桃花水之時、鄭國之俗、三月上巳於溱洧兩水之上、執蘭招魂、祓除不祥也。」と、類似する韓詩說がみえる。その他、王先謙『詩三家義集疏』が溱洧篇の毛序の箇所で指摘するように、『藝文類聚』卷4・歲時中・三月三日、『宋書』卷15・志第五・禮二、『初學記』卷3・歲時部などにも韓詩說が散見する。

次節以降、この視點の違いに注目して溱洧篇解釋の展開を檢討する。

三、溱洧篇の構造的把握

北宋・歐陽脩（1007-1072）の『詩本義』には、溱洧篇の具體的な解釋はみえないが、卷二・召南・野有死麕篇への言及の中で、溱洧篇の構造的特徵について次のようにいう。

詩三百篇、大率作者之體、不過三四爾。有作詩者自述其言以爲美刺。如關雎相鼠之是也。有作者錄當時人之言以見其事。如谷風錄其夫婦之言、北風其凉、錄去衞之人之語之是也。有作者先自述其事、次錄其人之言、以終之者。如溱洧之是也。有作者述事與錄當時人語雜以成篇。如出車之是也。[10]

詩三百篇において、おおよそ作者の用いた詩體は、三、四種にすぎない。（一つ目は）詩の作者が自分の言葉を述べて贊美や諷刺をしたものである。周南・關雎篇や鄘風・相鼠篇の類がこれである。（二つ目は）作者が當時の人の言葉を記錄してその出來事を示したものである。邶風・谷風篇は當時の夫婦の言葉を記錄したものであり、（邶風・北風篇第一章第一句の）「北風其れ涼し」は、衞國から去る人々の言葉を記錄したものであるのがこれである。（三つ目は）作者がまずその事柄を述べ、次にその人の言葉を記錄して、詩を締めくくったものである。鄭風・溱洧篇の類がこれである。（四つ目は）作者が事柄を述べることと當時の人の言葉を記錄することとを相交えて詩篇を作ったものである。小雅・出車篇の類いがこれである。

これによれば、歐陽脩は溱洧篇を「作者先ず自ら其の事を述べ」る箇所と「其の人の言を錄す」箇所の二つの要素から構成されると分析したと思われる。もとより古注においても詩篇中の「曰」以下の内容を、「士」「女」のことばと解しているのであろうが、詩人と詩篇中の人物のことばの區別については言及がない。また、韓詩說が詩人と詩篇中の人物とを同一視するのとは捉え方が異なる。詩篇内容をこうした構造的認識によって追究する解釋態度は、以降の宋代詩經學の展開に影響を與え、傳統的經學觀に束縛されない詩篇解釋が探求される契機として注目される[11]。

---

[10] 歐陽脩『詩本義』（四部叢刊續編本。臺灣商務印書館、1976）。

[11] 歐陽脩に對する評價は、江口尚純氏が「歐陽脩は古注成立以降、ほとんど初めて「詩人の立場」を强調した。この詩經を詩として見ようとする態度は至極當然のように思えるが、毛鄭の古注が詩の體系化の過程で完全な整合性を求めたために、詩人の本意を無視した極めて政教的な解釋を行ったことを考えれば、歐陽脩のこの立場は正當なものと言えるであろう」（江口尚純「歐陽脩の詩經學」（『詩經研究』第12号、1987））と述べるように、『詩』解釋史上の一つの轉換點としての意味を有す。また、種村和史氏が、歐陽脩の『詩本義』が野有死麕篇にて言及する箇所を引用して、「つまり、歐陽脩によって想定されている詩經の内容はすべて（歷史的あるいは同時代）の事實に基づいたり、記錄したりしたも

四、爲政者に對する諷刺

北宋・王安石（1021-1081）の『詩』解釋はつとに亡佚しているが、同時期の他の注釋の中にその逸文が傳わっている。そこには、『孟子』の四端說の一つである「羞惡の心」[12]に言及しながら、溱洧篇の主題を次のように捉えようとする說がみえる。

羞惡之心莫不有之、而其爲至於如此者、豈其人性之固然哉。兵革不息、男女相棄、而無所從歸也。是以至於如此。然則民之失性也、爲可哀、君之失道也、爲可刺。[13]

「羞惡の心」を持っていないものはいないのに、このよう（な行爲）に至る者がいるのは、人の本性がもとからそのようであるからではない。戰爭がやまず、男女が互いに相手を見捨てて、歸る場所が無いのである。そうしてこうなるまでに至る。そうであれば民衆が生まれ持っての性質を失うことは、哀れむべきで、君主が道を失うことは、刺るべきである。

王安石は、人の本性に「羞惡の心」があるため、溱洧篇に詠われる「淫」らな行爲が本來行われるはずはないとし、その原因を「兵革」に求める。つまり、鄭箋や『正義』は、「男女の合會」のみを非難するが、王安石は毛序がいう「兵革」を取り上げて、「男女」がそのような行爲に至る原因を指摘するのである。さらには「兵革」を行なう爲政者である「君」の在り方を問うことを詩篇の主題として、溱洧篇が「民の性を失う」ことを「哀」れみ、「君の道を失う」ことを「刺」る諷刺詩としての意味を提示する。

このような王安石の溱洧篇解釋には、先行研究が指摘するように、『詩』を政治的規範のことばとみなし、さらに毛序を詩人自らが作ったものとして重視する尊序の立場との一致を讀み取ることもできる[14]。毛序と詩篇内容との不合を指摘する『正義』の問題意識とは異なり、王安石は、毛序を敷衍し、詩篇に詠われる内容が爲政者の訓戒としていかなる意味を有するのかを强

のということになる。」と指摘する點は、歐陽脩の『詩』解釋の態度を考えるうえで參考となる。（「詩人のまなざし、詩人へのまなざし―詩經における詩中の語り手と作者との關係についての認識の變化―」（『詩經解釋學の繼承と變容―北宋詩經學を中心に据えて―』（研文出版、2017）所收、711頁。初出は『慶應義塾大學日吉紀要　中國研究』第5号、2012）。

[12] 焦循撰『孟子正義』（中華書局、1987）。公孫丑上に「無羞惡之心、非人也。……羞惡之心、義之端也。」、告子上に「羞惡之心、人皆有之……羞惡之心、義也。」とある。

[13] 邱漢生輯校『詩義鉤沈』（中華書局、1982）、程元敏『三經新義輯考彙評（二）－詩經』（國立編譯館、1986）を參照。該當箇所は、呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』卷八、段昌武『段氏毛詩集解』卷七、嚴粲『詩緝』卷八、『詩傳彙纂詩序』上に引用された王安石の說である。

[14] 井澤耕一「王安石『詩義』に關する一考察―朱熹の『詩』解釋との關わりにおいて―」（『詩經研究』第29號、2004年）を參照。その他、毛序が「兵革」について言及する出其東門篇と野有蔓草篇に對する王安石の言說は傳わっていない。ただし、李樗・黃櫄『李迂仲黃實夫毛詩集解』卷十一・野有蔓草篇（通志堂經解本、江蘇廣陵古籍出版社、1993）の李樗注に、「王肅亦曰、草之所以能延蔓者、被盛露也。民之所以能蕃息者、蒙君澤也。王氏之說亦如此。」とあり、政治的意味合いによって解釋する王肅の說と、王安石の說が類似していたことが述べられている。

調する。そのために、溱洧篇解釋において毛序のいう「兵革」に着目して解釋を展開したのであろう。

五、鄭國の風俗と詩篇内容の差別化

范處義（生卒年不詳、十二世紀）は、『詩補傳』[15]の序において「補傳之作以詩序爲據、兼取諸家之長、揆之情性、參之物理、以平易求古詩人之意。（『詩補傳』は毛序を據り所にして作ったもので、諸家の優れたものを併せ取り、情性を推し量り、物の理を照らし合わせて、詩人の意を平易に求めた。）」と、尊序の立場から詩篇に對して「情性」と「物の理」を考え、詩人の意を追求しようとしたことを述べる。先述の王安石と同様に尊序の立場ではあるが[16]、卷七に收められる溱洧篇の解釋は、王安石と異なり、男女の行爲を肯定的に捉えようとするものである。まず、毛序に對する范處義の解釋を確認する。

列國之風、惟鄭衞淫亂爲甚。衞之亂由於上之化、鄭之亂由於兵之故。詩之所刺者備矣。後之論鄭衞者、于衞則謂地有桑間濮上之阻、男女亟聚會、聲色生焉、于鄭亦謂山居谷汲、男女亟聚會、故其俗淫。是皆不深攷詩所刺之由、而歸咎于風土爾。出其東門、野有蔓草、溱洧、三詩之序、皆明言男女或相棄或失時由于兵革、而溱洧謂莫之能救。然則欲救鄭之亂者、當以偃兵息民爲先、不可誣也。

列國の風俗は、鄭衞だけが甚だしく「淫亂」である。衞の亂は上からの風化によって起こり、鄭の亂は戰爭の故によって起こったのである。詩の諷刺（の意圖）は十全である。後世の鄭衞を論じる人々は、衞國ではその土地に「桑間濮上の阻」があり、男女が頻繁に集會して、「聲色」（淫らな音樂）が生まれると言い、鄭國でも山に居住し谷に水汲みし、男女が頻繁に集まるので、鄭の風習が「淫」だと言う。これら（後世の解釋）はすべて詩篇が諷刺する理由を深くは考えずに、その咎を風土に歸したのである。出其東門篇、野有蔓草篇、溱洧篇の三篇の序は、どれも男女が相手を棄てたり、或いは（婚姻の）時節を失ったりすることが戰爭によるものだと明言しており、溱洧篇では「之を能く救う莫し」と言っている。そうであるなら鄭國の亂を救おうとする者は、當然戰を止めて民を休ませることを優先すべきで、（鄭國の風俗を）刺るべきではない。

范處義は、鄭衞の風俗を「淫亂」とみなすようだが、その原因は衞國の「上の化」や鄭國の

---

[15] 范處義『詩補傳』（徐乾學等輯・納蘭成德校刊『通志堂經解』所收康熙一九年刻本景印本。大通書局、1978）。

[16] 范處義の『詩』解釋態度については、黄忠慎「范處義《詩補傳》與王質《詩總聞》的解經取向及其在《詩經》學史上的定位」（『彰化師大國文學誌』第15期、2007）、同「范處義《詩補傳》的解經特質及其在《詩經》學史上的存在意義」（『逢甲人文社會學報』第16期、2008）に詳しく論じられている。

「兵の故」にあり、この原因を諷刺しようとする意圖が詩篇にあると考える。これは溱洧篇の毛序がいう「亂を刺る。兵革息まず、男女相い棄て、淫風大いに行われ、之を能く救うこと莫し。」を敷衍した理解である。ただし、溱洧篇には「淫亂」な様子は詠われていないと考え、「後の鄭衞を論ずる者」に對して「是れ皆な深くは詩の刺る所の由を攷えず、咎を風土に歸すのみ」と、特に、詩篇の諷刺の意圖を鄭國の風俗と關連付ける諸解釋を批判する。では、范處義は、溱洧篇をいかに解釋するのか。彼は第一・二章末句に詠われる「芍藥」を「贈」る行爲について、次のような独自の見解を提示する。

鄭之國俗、以三月溱洧水盛流深之時秉蘭、以祓除不祥。何尤之有。以其淫風既行、故男女殷盛。乘此出遊、爲相誘之計。……詩人終約以禮、故贈以勺藥。寓相謔之意、未至於亂也。宋玉好色賦曰、目欲其顏、心顧其義。揚詩守禮、終不過差。玉所謂揚詩者、蓋溱洧之類。誠得詩人之意也。或曰、韓詩以勺藥爲離草、又崔豹古今注、牛享問仲舒、爲勺藥名可離、故相別以贈之。竊謂既贈以離草、明不相親。正所謂終不過差也。

鄭國の風俗は、三月の溱洧の川の水が溢れて流れが深い時に「蘭」を摘んで、不祥を祓い除くものである。何の過ちがこの風俗にあるだろうか。淫らな風俗はすでに行われており、故に男女が数多集まる。この出遊に乘じて、相手を誘い出す計略とするのである。……詩人は禮を用いて約束を全うするので、贈りものに「勺藥」を用いる。互いに諧謔する意味にかこつけるが、未だ「亂」には至っていない。宋玉の「登徒子好色賦」に、「目に其の顏を欲して、心に其の義を顧みる。詩を揚げて禮を守り、終に過差せず」という。宋玉の賦にある「詩を揚げる」とは、思うに溱洧篇の類であろう。まことに詩人の意を得ている。或る者は、韓詩は勺藥を離草とすると言い、さらに崔豹の『古今注』には、牛享が仲舒に（離別の際に勺藥を贈る理由を）尋ねると、（仲舒は）「勺藥」は別名「可離」なので、これを贈るのだ（と答えた）。（別れるのに）離草を贈る以上、互いに親密でないことは明らかであると思う。正に所謂る（「登徒子好色賦」の）「終に過差せず」である。

范處義は、宋玉の「登徒子好色賦」と崔豹の『古今注』[17]を根據に、溱洧篇は「未だ亂に至らざる」ものだと考える。「登徒子好色賦」は、前半に楚の登徒子と宋玉の「好色」についての論難があり、後半に秦の章華大夫と「南楚の窮巷の妾」の逸話が語られる賦である。范處義の引用部は、後半の章華大夫が溱洧の川邊で出會った麗しい女をたぶらかそうとした後、女が章華大夫に返答する場面の中にみえる。

---

[17] 崔豹撰、牟華林校箋『『古今注』校箋』（綫裝書局、2015）203頁參照。問答釋義第八に「牛亨問曰、將離別相贈以芍藥者、何也。答曰、芍藥一名可離、故將別以贈之、亦猶相招召贈以文無、文無亦一名當歸也。」とある。

復稱詩曰、寤春風兮發鮮榮。絜齋俟兮惠音聲。贈我如此兮不如無生。因遷延而辭避。蓋徒以微辭相感動、精神相依憑、目欲其顔、心顧其義、揚詩守禮、終不過差。[18]

（女は返答して）詩を詠じた。「春風に氣付いて鮮やかな花が咲きました。禊をして待っていると聲をかけていただきました。（しかし）このような贈り物をもらっては死んだ方がましです」と。そのまま後ずさりして辭去した。思うに徒に巧みな言葉に感じて、心を寄せたが、目では顔を好ましく思っても、心では正しい道を考え直して、詩を詠じて禮を守り、結局は過ちを起こさなかった。

女の詩には、「春風を寤り鮮榮を發す。絜齋して俟ち音聲を惠まる。我に贈ること此くの如きなるは生無きに如かず」と、前半二句には章華大夫との出會いが、後半一句には贈り物に對する怨みが詠われる。その後の章華大夫のことばの中に、范處義の引用部「目に其の顔を欲し、心に其の義を顧みる。詩を揚げて禮を守り、終に過差せず」がある。「登徒子好色賦」において、「詩を揚げて禮を守」るとは、女が詩を詠じて男の誘いを斷ったことを言おうとするものだろうが、范處義は、この女の詩と溱洧篇の意味する所が類似すると考えるのである[19]。

また、范處義が引く崔豹の『古今注』に據れば、「勺藥」は別名「可離」とも言い、別れ際に贈る物であったという。だとすれば、溱洧篇の「勺藥」を贈る行爲は、女に誘われて出てきた男が、別れ際に用いるべき「勺藥」を贈るのであって、「禮」に適う行爲が詠われていることになる。鄭箋がこの行爲を「恩情を結ぶ」とし、『正義』が「男女當に禮を以て相配すべきも、今淫泆たるは是くの如し。故に之を陳べて以て亂を刺る」と批判したのとは異なる主張である。さらには、鄭國の風俗を「淫」と關連付けようとする班固や許愼らの解釋への反論にもなろう。

以上述べてきたことを整理すれば、范處義は、鄭國に「淫亂」な風俗があるとするものの、溱洧篇が詠われる意圖は、鄭國の「亂」の原因である「兵革」に對する諷刺にあって、「淫亂」な風俗に対する諷刺ではないと毛序を敷衍して考えていた。また、宋玉の「登徒子好色賦」に登場する女が詩を用いて章華大夫の誘いを斷り「禮」を守ったように、溱洧篇では、別れ際に「勺藥」を送っており、「禮」に適った正しい行爲が詠われているため、「淫亂」な風俗を詠ったものでないとするのである。

鄭國の風俗と詩篇の内容とを切り離して解釋するという點で、毛序以外の歴代解釋に對する批判を展開し、別の讀みの可能性を提示しているのは興味深い。ただし、なぜ「淫亂」ではなく「禮」に適った行爲が詠われていると捉えることで、「兵革」への批判の意圖を讀み取ることができるのかは説明されていない。あくまでも范處義は尊序の立場から、毛序がいう「兵革」

---

18 『文選』卷十九。

19 しかしながら、范處義が引用する「登徒子好色賦」では女が男の誘いを斷るのに對して、溱洧篇は男が女の誘いを斷っており、詩篇に詠われる内容が嚴密には對應していない。

の意圖を説明しない諸解釋への批判のために、詩篇内容を「淫」と捉えるか否か、という點で獨自の説を展開しているのである。

六、韓詩説への着目

南宋の王質（1127-1188）の『詩總聞』卷四[20]では、先述の諸解釋が毛序と詩篇内容との關連性を問題としていた場合とは異なり、毛序を廢して、さらに「淫」や「亂」についても言及せずに解釋する。

第一章には、「女情有所迫、男心有所憚。故再督而始從。（女の情には差し迫る所が有り、男の心には憚る所が有る。故に（女が）再び催促してようやく（男が）從う。）」と注しており、迫る「女」と躊躇する「男」のやり取りが詠われることに言及する點は、先行の注釋と同樣である。第二章では次のようにいう。

舊說、椒、滋陽者也。故女贈男以椒。芍藥、滋血者也。故男贈女以芍藥。雖不害爲過用意、然揆以人情、未必如此。相遇相謔之際、正世俗所謂奔路者也。安得更有所擇。

舊說に「椒は、陽を養うものである。故に女は男に椒を贈る。芍藥は、血を養うものである。故に男は女に芍藥を贈る」という。（贈り物に對して）過剩に氣を配ることを憚っていないとはいえ、しかし「人情」によって推し量れば、未だ必ずしもこのようではない。互いに遇って戯れる時とは、ちょうど世俗に言われる男と驅け落ちするということである。どうしてその上（贈り物を）選ぶことがありえようか。

「舊說」が誰による言說であるかは不明だが、これは「椒」と「芍藥」のそれぞれ効能を擧げて、女から男、または男から女への贈り物の違いを說くものである。「椒」の贈答については、陳風・東門之枌篇の第三章に次のように詠われている。

穀旦于逝、越以鬷邁。	穀旦于に逝く、越に鬷を以て邁く。
視爾如荍、貽我握椒。	爾を視るに荍の如し、我に握椒を貽る。

【鄭箋】女乃遺我一握之椒、交情好也。此本淫亂之所由。

女が私に一握りの椒を贈り、好意を交わすのである。これは淫亂の生じるもとである。

鄭箋に據れば、「女」が「男」に「椒」を贈ることが詠われると解釋され、「舊說」と一致する。ただし、王質は舊說を否定し、「人情」によって解すれば、「相い遇い相い謔す」ことが詠われている以上、詩人は「路に奔る」者であると考える。そして、最後に韓詩說を引用して、次のようにいう。

---

20 『詩總聞』（四庫全書本、商務印書館）。

士始以辭拒女、卒以情從女。士過輕于女過。蓋自女先發端而又督成也。鄭氏以爲仲春、韓氏以爲上巳、則季春也。鄭俗于此、招魂續魂、秉蘭草、祓除不祥、皆附合此詩、氣象頗似晩春聚會遊觀之時。但不知上巳何考。

男ははじめに辭去して女を拒んだが、ついには情によって女に從った。男の過ちは女の過ちより輕い。思うに女が先立って再び催促して成し遂げたのであろう。鄭氏は（詩篇に詠われる時期を）「仲春」とするが、韓氏は「上巳」としており、これはすなわち「季春」である。鄭國の風俗がこの地で、「招魂續魂し、蘭草を摘み、不祥を祓い除く」のは、すべてこの詩篇に附合し、雰囲氣は晩春に集會し物見する時によく似る。ただ「上巳」とするのはどうしてなのかが分からない。

王質は、男と女の「過ち」の輕重について、女が男を誘ったことに幾分かの罪の重さがあると女への非難を示唆するが、「淫」や「亂」といった評價はしない。また、韓詩說が「此の詩に附合」し、「氣象は頗る晩春の聚會遊觀の時に似る」として、詩篇に詠われる内容を捉えようとするが、「上巳」の風俗との結びつきについては疑問を呈しており、その判斷は愼重である。

先行研究では、韓詩說がいう禊祓の俗は鄭國に限られたものではなく、また、「上巳」との結びつきは漢代以降に固定化されていったものであると考えられている[21]。なぜ王質が「上巳」という點を疑問としたのかその理由が具體的に說明されていないのは惜しまれるが、溱洧篇に付與されてきた經學的な解釋をできる限り取り拂って、さらに詠われる内容をそのまま最も單純な形で解釋した說が展開されているといえよう。

七、淫奔者自身のことばとみなす解釋

南宋・朱熹（1130―1200）の『詩集傳』卷四[22]にみえる溱洧篇解釋は、毛序を排除し、さらに韓詩說を引用する點で王質のものと類似している。異なるのは、「此詩淫奔者自叙之詞（この詩は淫奔者が自ら述べたことばである）」と、詩人を「淫奔者」とみなして、淫詩說としての性格を强調する點である。これは『詩集傳』序の「凡詩之所謂風者、多出於里巷歌謠之作、所謂男女相與詠歌、各言其情者也。（およそ『詩』の所謂「風」（の詩篇）は、巷の歌謠から起こった作品が多く、所謂男女がともに詠い、各々がその情感を述べたものである。）」という、朱熹の國風篇全體に對する認識とも符合する。

---

[21] 高田眞治『詩經』上（集英社、漢詩大系第一卷、1966）の溱洧篇の項（354～358 頁）、宗懍著・守屋美津雄譯注・布目潮渢・中村裕一補訂『荊楚歲時記』（平凡社、東洋文庫、1978）の「三月（二三）　三日、禊祓の起源と曲水の飲」に付された守屋氏による注 16、20（120～126 頁）を參照。

[22] 朱熹『詩集傳』（中華書局、1961）。

また、『朱子語類』巻八十一に「許多鄭風、只是孔子一言斷了曰鄭聲淫。聖人言鄭聲淫者、蓋鄭人之詩、多是言當時風俗男女淫奔、故有此等語。（鄭風の多く（の詩篇）は、ただ孔子が「鄭聲淫」といって一言で斷言する。聖人（である孔子）が「鄭聲淫」と言うのは、おもうに鄭人の詩篇の多くが、當時の風俗である男女の淫奔について言っているので、このようなことばがあるのであろう。）」と、「鄭風」と孔子が言う「鄭聲淫」との關連について言及する。はじめに述べた漢代の班固や許愼らの言說に連なる溱洧篇解釋が、朱熹によって再提示されるのである。これ以降、朱熹の『詩集傳』による淫詩說が廣く行われる一方で、第一節で擧げた『論語』の「鄭聲淫」解釋に對する問題提起がなされる。また、『詩集傳』が毛序を廢した解釋であったために尊序派からの批判が展開され、「鄭聲淫」と鄭風との關係が詩經解釋史上の一つの重要な問題として扱われるきっかけになる。

例えば、朱熹と同樣に、溱洧篇を淫奔者が詠ったものであるとする解釋は、南宋・戴溪(1141-1215)の『續呂氏家塾讀詩記』[23]にみえる。

> 溱洧、志鄭聲之淫、以示後世。此王者所宜放也。士與女非素相期者。溱洧之上、士女殷盛、秉蕑而遊、蓋女常先男、而冶容者多誨淫。女有欲觀之言、士有旣且之答。始相與嬉戲歡樂、諧謔贈遺、形之歌詠、恬不爲恥。
>
> 溱洧篇は、「鄭聲」の「淫」を記して、後世に示したものである。この内容は王者が放棄すべきことである。男と女は平素から互いに會うものではない。溱洧の邊に、多くの男女が蕑を摘んで戲れるのは、思うに女がいつも男に先立っており、妖艶なすがたの女は淫らなことを教えることが多いのである。女には觀に行こうと欲することばが有り、男には旣に行ったという答えが有る。（だが）一緒に遊び樂しみ始め、諧謔して贈りものをし、このことを歌詠にあらわして、恬として恥じなかった。

戴溪は、特に女の「淫」らなさまを强調しつつ、「始めて相與に嬉戲歡樂、諧謔贈遺し、之を歌詠に形わして、恬として恥と爲さず」と、男女が戲れ贈り物をすることを詩篇に詠ったと考える。これは、朱熹のいう「此の詩は淫奔者の自叙の詞なり」に類する解釋であり、さらに、詠み手はそのことを恥じていないと說明を付け加える。

一方で、「淫奔者」が自ら作った詩篇ではないと批判する解釋は、南宋・楊簡（1141－1226）の『慈湖詩傳』巻六[24]にみえる。

> 相謔、毛無傳、鄭箋謂行夫婦之事、殆未必然。然士與女相戲謔如此、已大亂矣。故詩人刺之。……或疑是詩不正、遂曲爲之說、不思士曰女曰詩人之辭也。敘其事、所以著其惡也、

---

[23] 戴溪『續呂氏家塾讀詩記』(四庫全書本、商務印書館)。

[24] 楊簡著、董平點校『楊簡全集』第二冊所收『慈湖詩傳』(浙江大學出版社、2015)。

刺之也。非士女相謔者自作是詩也。

「相謔」は、毛氏に傳文が無く、鄭箋に「夫婦の事を行う」と言うが、おそらく必ずしもそのようではなかっただろう。だが男と女がともにこのように戯れふざけていれば、すでに大いに亂れている。故に詩人はそのことを刺ったのだ。……或る者はこの詩篇が正しくないことを疑い、歪曲して解釋し、「士曰」「女曰」を詩人のことばだとは思わなかった。その出来事を叙述するのは、不義を明らかにして刺るためである。ともに戯れる男女が自らこの詩篇を作ったのではない。

楊簡は、古注による傳統的詩經觀から脱することなく、詩篇に詠われる内容を「大亂」とみなし、詩人がその「亂」を刺る諷刺詩だと考える。そして、明確に名指しはしないものの、「士女の相謔する者自ら是の詩を作るに非ざるなり」と、男女が自ら作った詩篇だとする朱熹の『詩集傳』が提示した解釋を批判するのである。

このように、朱熹とほぼ同時期において、すでに『詩集傳』が提示した淫詩説の受容と批判が行われていた狀況を確認できよう。

八、おわりに

本稿では、漢代から南宋の朱熹に至るまでの鄭風・溱洧篇の歴代解釋の特徴を検討し、その解釋史における位置付けを考察してきた。取り上げた歴代解釋の展開を整理すれば次のようになる。

①鄭國の風俗の特徴を主に溱洧篇によって捉え、『論語』衞靈公篇の「鄭聲淫」と關連付ける説（班固、許愼）。

②鄭國の三月上巳の禊祓の俗との關連を指摘する解釋（韓詩）。

③「兵革」の不斷、男女の離散、「淫風」の流行といった鄭國の「亂」に對する諷刺詩とする解釋（毛序）。

④詩篇に詠われる男女の「淫」らな風俗に對する諷刺詩とする解釋（鄭箋、『正義』）。

⑤詩篇内容を詩人と詩篇中の人物のことばとに分ける構造的把握の提示（歐陽脩）。

⑥「淫」となる原因である「兵革」を行なった爲政者に對する諷刺と捉える解釋（王安石）。

⑦詩篇に詠われる内容を「禮」に適う行爲と捉える解釋（范處義）。

⑧韓詩説にいう禊祓の俗との關連を指摘する解釋（王質）。

⑨淫奔者が自ら詠った淫奔詩とみなす解釋（朱熹）。

第一節で取り上げた①の班固や許愼らの言説は、鄭國の風俗と『詩』鄭風、さらに『論語』の「鄭聲淫」を關連付けた興味深い解釋であるが、本稿で取り上げた代表的な宋代の注釋から

推察されるように、⑨の朱熹に至るまで特に注目されるものではなかった。一方、經學的解釋の主流となる古注では、③の毛序が「兵革」の不斷から男女の離散、「淫風」の流行に至るまでの一連の狀況を「亂」であると指摘するものの、④の鄭箋や『正義』では「兵革」には言及せずに、詩篇に詠われる男女の「合會」のみを强調しており、兩者の「亂」に対する視點の違いが生じていた。この違いについては、第二節において、毛序が提示する詩篇の主題と詩篇内容との整合性への意識によって生じた可能性を指摘した。以降、宋代に展開される溱洧篇の諸解釋は、主に詩篇の内容を踏まえて毛序がいう「亂」をいかに捉えるべきか、詩篇に詠われるのは「淫」であるか否か、という點で議論されていくこととなる。

⑥の王安石は、『孟子』がいう人の本性に「羞惡の心」があることを理由として、詩篇に詠われる男女の「淫」らな行爲が本來行われるものではないと考える。そして、毛序を敷衍して、「亂」の原因である「兵革」、さらには「兵革」を行う爲政者の「失道」に対する諷刺の意圖を强調していた。⑦の范處義は、詩篇の主題として王安石と同樣に「亂」の原因である「兵革」に着目するものの、兩者の詩篇内容の捉え方は異なる。范處義は、宋玉の「登徒子好色賦」を引き合いに出し、詩篇に詠われる「芍藥」を贈る行爲が「禮」に適ったものであるとみなす。これにより、鄭箋に連なる歷代解釋の詩篇中の男女の行爲を「淫」とする評價の見直しを圖ろうとするのである。

⑧の王質は「芍藥」を贈る行爲について、②の韓詩說がいう禊祓の俗との關わりを指摘し、溱洧篇の歷代解釋における「亂」や「淫」といった經學的價値觀からの脱却を試みていた。そして、⑨の朱熹は王質と同樣に②の韓詩說を引用するものの、溱洧篇の作者を「淫奔者」とみなし、さらに、①の班固や許愼らと同樣に、『論語』における孔子の「鄭聲淫」評價と鄭風諸篇とを關連付けて、淫詩であることを强調する。

溱洧篇の歷代解釋は、毛序の「亂」に對する鄭箋や『正義』の視點の違いを發端として、以降、各解釋者の「兵革」や男女の在り方への認識の違いによって議論が展開されていった。そして、南宋では古注とは異なる韓詩說や『論語』の「鄭聲淫」が取り込まれ、多樣な解釋の可能性が追究されていったのである。

以上は、溱洧篇に何が詠われているのか、という事柄や主題に關する解釋を中心とした展開である。これに對して、⑤の歐陽脩による詩篇内容に對する作者と詩篇中の人物のことばの區別や、②の韓詩說と⑨の朱熹による作者と詩篇中の人物の同一視といった、どのように詠われているのか、という構造的把握についての言及も一部取り上げた。しかしながら、本稿で取り上げた宋代の解釋は前者が中心であり、後者に關する意識が詩篇解釋においてどのように展開していくのかについては、朱熹以降の解釋の檢討と合わせて、今後の課題としたい。